

十野國誌

五

| | | | |
|-----|---|---|---|
| 和書門 | | | |
| 類 | 號 | 函 | 架 |
| 八 | 五 | 四 | 一 |
| 二 | 一 | 一 | 一 |
| 冊 | 冊 | 冊 | 冊 |

| | | | |
|------|---|---|---|
| 內閣文庫 | | | |
| 和書 | 類 | 號 | 冊 |
| 八 | 五 | 一 | 一 |
| 二 | 一 | 一 | 一 |
| 冊 | 冊 | 冊 | 冊 |

| | |
|------|----------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 8852 |
| 冊數 | 12 (5) |
| 函號 | 174 229 |



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



下野國誌
圖書部

下野國誌五之卷

佛閣僧坊

芳賀百姓越智直守弘識

滿願寺

都賀郡日光山なり、一乘實相院とも云、山の衆徒二十六院坊舎八十

字あり、圭田一万三千六百石、閑山勝道上人あり、觀世音の坐、山と云

義を以て、補陀洛山と号くと云、弘法大師登山してあり、日光山と改む、

大日遍照の山と云、義なり、其後慈覺大師登山して法華成

唱へて天台の山と、形なり、中興閑山慈眼大師、初祖上人あり、四十

九世あり、同五十世ハ毘沙門堂大僧正公海、五十二世ハ輪王寺一品守澄

法親王と申奉る、夫より以来世々輪王寺宮と稱し奉り、當時ハ六十

世一品准后舜仁法親王と申奉るなり、

南方、觀音淨土
補陀洛世界
北方、觀世音淨土
寂光世界
東方、藥師淨土
瑠璃光世界
西方、彌陀淨土
極樂世界
中央、大日遍照
トアリ

下野國誌五

補陀洛山草創建立記

夫二荒山者日本根子皇スノムネイヤテリ統彌照天皇諱山部之
御願勝道上人之草創滿願權現之領地而佛教
相應靈砌也抑勝道上人者下毛野國芳賀郡之
人俗姓若田氏也其先祖者人皇十一代活目入
彦五十狹茅天皇第九皇子池速別命イケハヤワケノミコトノナ為勅使奉
崇伊勢太神宮於五十鈴川上然命依事緣而下
向東國其後依痾疾損一目故不能還洛遂止住

下毛野國室八島而為鄉人子孫綿綿焉池速別
命十八代之孫稱高藤歎無一子當國伊豆留
岩窟有千手觀音靈像是人皇第三帝安寧天皇
御宇天人降作之云高藤及夫婦俱詣彼靈像祈
儲子一七日夜結願已宵夢自岩窟與長三尺有
餘白蛇金鉢捧來而與焉夫婦受之熟視則徑五
寸許其形八葉中納白玉以藤糸橫堅纏之寤而
悅無限既故住家去不經幾日懷胎畢天乎七年

此安寧天皇とあり
師本津彦手見天皇と
記以言と云
漢様の謚ハ
人皇五十八代
桓武天皇の
御宇淡海真
人御松玉勅
を以てけし
むり書記
の私記を見
たり按は是
人皇第三帝
とあり作
之云と云
後人の書加
へたもの
なり

四月二十一日日中產生焉。下毛野國芳賀郡東
大内高岡郷上人降誕之處也。因茲於此處建精
舍安樂師像。號佛生寺。誕日奇異不可勝計。雷發
音祥雲覆簾屋。天花散庭。異香薰地。經一時。從天
降下一錫杖。其長五尺。上人所持而童名號藤系。於幼
稚之時造石塔砂堂。崇神拜佛。因茲諸童子名云
興寺。同十三年九月十一日生。年七歲而供香花
於天。及夜中神童來而云。吾是天上聖眾明星天

子也。汝可興行佛法者也。故授汝無師智。恒可唱
之。南無歸依佛。南無歸依法。南無歸依僧。衆生無
邊誓願度煩惱。無邊誓願斷法門。無邊誓願覺無
上善提誓願證如此。授已沒而不見。雖有此教不
語父母。况於他人乎。又常夢二十八將五大明
王為守護。令圍遶我身。故心根欲避人家炊煙。
嘗靈境甘露。遂天平勝寶六年行年二十歲之時。
夜來偷逃脫住處。到伊豆留岩窟。靜念千手觀音。

大劔峯、出流中、北の方十里許、日光、南の方八里餘、古峯、原の北、小當て三里許、あり

誦三歸四弘法、父母不知其行方、而悲歎無限、既送三回之春秋、己天平寶字元年十一月四日夜、夢顧北方有大山、其上有大劔長三尺許、寤而異怪、無極任夢、遂出嶺窟、向北方旁尋之、白雪深々、不能進、發誓願而捨身命、既入深洞、則如夢中所見、故上山頂苦修練行矣、化人來與美菓食之、無少飢、住此又送三箇年、同四年歸至伊豆留室、同五年正月二十一日、到于當國大山、鄉藥師寺、藥師

寺者天武帝皇后疾依之詔被創藥師寺、愈、不圖見鑒真和尚弟子如意僧都

唐惠雲律師、大唐揚州人、名優婆斯迦等稱善哉、々々上人終隨律德

二十七歲於藥師寺剃髮、受沙彌十戒、七十二歲

儀名嚴朝、而後自改號勝道、同六年四月十五日

受具足戒、修大悲、虛空藏求聞持法、讀誦華嚴法

華金光明經、唯識論等數部、經論住寺五箇年、天

平神護元年九月下旬、行年三十一歲、出寺歸至

大劔峯、同二年三月中旬、上絕巔、顧四方、當北山

本朝高僧、傳沙門惠雲、唐國人、鑒真之弟、子住成壇院、居第五世、移讚州屋島寺、為第一世、如意僧都、傳、載、但、共、本朝、來、茶師、寺、居、緣、八、同、寺、の、起、小、ゆ

四色雲常聳空中作奇異思襪負經像裂裳纏足
向北方尋求到當山麓有一大河嶺岩峩々流水
浩々欲涉不容易于時上人誦三歸并求聞持咒
即從河北涯一化神出來其姿如夜叉長一丈餘
頸係鬪體身著青黑色衣左手按腰右手握二蛇
青化神出勵聲告上人曰我是深沙大王也昔玄
井三藏自天竺渡漠土時奉越流沙今又上人此
來即可渡放二蛇二蛇即亘河上一南頭其形如虹

寬忽為橋上人即渡蛇橋忽橋上生山管届北涯已化神
及蛇橋沒而不見則遂宿念結草庵勤行焉有夜
異人來語此所來由具在別記此北嶺號四神峯東青
龍南朱雀西白虎北玄武所住也公欲識知迎朝
日登岳上視之云則依教上人登嶺上見之不違
先所見從四方四色雲涌出即於此處建堂奉安
千手像號四本龍寺矣神護景雲元年四月十日
欲見絕頂精進念誦二七日已攀躋高巔歷四十

里許於嶽半腹有一大湖宿湖北岸經行念誦又
欲登其頂上路險深雪皚々雷吼振動更不得上
後半腹還降住湖宿經三七日同五月十三日還
本龍寺送十四箇年之星霜其中練行動念不怠
念誦讀經不數薄衣寒月清嵐寤睡有食乏甘法
味而自忘飢鑽仰之効稍顯于外又天應元年四
月起先志欲到山頂霖露變黶而不得陟同二年
三月引率道珍勝尊教是仁朝等至湖宿精勤修

黒川春村云
脱文あり本
を校むるに
十字と得
てとくまれ
ハ事畢の二
字とす
降湖宿禮
日勤修三箇

行一七日遂達山頂顧四方靈瑞銘肝勝區驚目
更非言語所及經三箇日事畢又還本龍寺次延
曆三年三月二十一日詣中禪寺與道珍等相謀
造船長二丈廣三尺掉湖遊覽先止南湖後住北涯供香花
修行上人偷於心底祈念誠此處非凡地定神靈
異人卜宅歟唯願示我本迹矣同四月四日届南
湖歌濱眇四條寺岫於湖上有一白蛇スミヤカニ速疾浮来
頸係一顆璜人面白毛而引率十餘蛇乍近上人

慈觀僧云
一本歸依
の下子渴仰
乃二字あり
可なりん
之

曰、吾是此所鎮神繇公所願今顯現語已忽然不見同二十日至西湖於水中現金色千手觀音其長八尺有餘威德巍巍相好圓滿坐青蓮放大光明忽雨入湖中矣粵上人彌摧肝膽歸依徹髓同五月二日與道珍等相議建神宮精舍號中禪寺刻丈六立木千手像而仰悲願側立社殿奉崇權現而神化而經四箇年畢同七年四月住岸修行同五月上旬移南涯結草庵勤修一七日夢峯上

有大日輪其中現五大尊像不動軍荼利降三世大威德金剛夜又各執標示列坐焉寤後如所夢造五大尊像建堂號日輪寺當其前有小島上人暫住其島禮拜懺悔奉祈聖朝安穩天人來影歌詠讚歎云柏原天皇遙聞之睿感以延曆八年四月四日令任上毛野國總講師因茲此島名上野島矣或云勅使上総及平連時大同二年夏東國旱飈青苗悉枯乾于時下毛野國司利遠奉屬上人令請雨故上山

頂祈焉。又至江尻瀧念誦善神納受應時甘雨霖
々依之以當國土產永奉獻權現是當山興森之
起也。而間每歲四月二十一日與弟子俱詣中禪
寺捧法施致勤行祈朝家上人掃不淨作結畧故
為二便界外二十里到香野谷矣。大同年中於四
本龍寺亦奉勸請權現備膳供捧法味朝夕不怠
奉祈朝家及國民安寧云。又當河南涯有嶺名精
進嶺崇神號星御前上人恒語弟子曰我興隆此

寺精進修行是明星天子力也。其故吾七歲時供
香花於天明星來影授吾三歸等法。又河北涯崇
深沙大王開此山是二神與力也。汝等尤可歸依
此兩神也。上人如恒例以弘仁七年四月詣中禪
寺一七日夜念誦讀經其間大雨頻降洗大地湖
水揚白浪山林溪谷悉振動不似日來見惟異彌
於社壇前恭敬禮拜修法施乃應時衆嶽鎮而異
香薰郁忽然三化神現一如天女其姿端嚴美麗

以玉冠瓔珞飾其身齡三十有餘一束帶把笏衣冠直威儀端嚴年五十有餘鬢髮黑白半也一著狩衣白袴負武具形貌鮮白齡十五六許各敷鹿皮而列坐其外隔庭異類神扈從眷屬前後圍遶並居上人恐跪踞深致信心化神告上人曰我是此山鎮神也於此靈處既送二千八十餘歲之星霜師依宿緣而開此山公為本願主我成護法神俱守人法濟群生至盡未來之際盟約已上人聞

慈觀僧正
云上人の
上ノ一本神
復告曰の四
字あり佳
あらんとい

神勅心神銘肝感淚濡袖親拜妙躰豈非往昔宿緣哉上人明年春可入寂對顏限今日愁淚難拭如是互語已忽然去經三箇日出中禪寺室還四本龍寺同年八月四日本龍寺北去八九町有岩窟名離怖畏處上人至彼定入定之處同八年二月二十五日夜半告十餘人之弟子等曰我與聖帝有深契依朝息興隆當寺奉仰權現化導汝等敢勿令違失我山是太乘相應之地觀音利生之

處也各一心興隆佛法奉崇神祈皇家宜利益人
民語已三月一日行年八十三歲如入禪定入寂
已矣。

和仁九年戊戌二月日記之 仁朝

道珍 教旻 尊鎮

此補陀洛山建立記元祿年間書著一以下野風土記と云
ゆの中にあつて日光山の慈觀僧正の所藏の本を以て校
合し、それのそつちあり、但し右の下野風土記といふ書々出雲風土
記豊後風土記といふ常陸風土記等の類ひふあつて、いづか名所
古跡等をまゝに、これと上下二冊を、引書ハ東鑑元亨秋書歌
枕名寄のまゝに、いづか俗説を擧げて、大くハ、これとあま事
のそつちあり、記者も、誰か、志、おぼゆる、下野の事と記
し、そのまゝ、いづか、いづか、勝道上人の傳ハ元亨秋書
載、これと、高野大師の補陀洛山の碑文より、記し、これハ、上
剃髮の年曆、す、入寐、り、歳時、を、書、り、し、り、彼師練、り、の
記、を、い、見、さ、り、に、や、い、ち、を、し、て、此記の、そ、つ、ち、ハ、日本
根子皇統、称、照、天皇、諱、ハ、山部、と、ある、紹運録、ハ、人皇、五、十、代、桓、武、天、皇、諱、
ハ、山部、親、王、亦、日本、根子、皇統、称、照、尊、と、称、を、又、柏、原、天、皇、と、申、奉、れ、
光、仁、天、皇、第、一、の、皇、子、と、あり、平、城、嵯、峨、淳、和、の、御、父、帝、と、
あり、す、は、あり、称、照、を、称、照、と、誤、り、本、何、り、弁、之、り、

下野國誌五

勝道上人木像

日光山四本龍寺安置之

傳云上人自刺也云
怖魔印ヲ結ビ給ヘリ



三佛堂ノ内ニ錫杖ヲ持給フ
像ヲ安置ス
又中禪寺ノ湖南ノ日輪寺ニ
安スルハ念珠ト獨鈷トヲ持テ
頭ヲ傾ケ給ヘリ依テ聞耳ノ
像ト呼ナラハシタリ

教旻僧都木像

同本宮如法經堂安置之



教旻僧都ハ日光山
座主ノ初祖ニテ勝道
上人ハ関山ノレドモ宣旨
ナキユニ座主トハ唱ヘズ

瀧尾草創建立記

夫瀧尾者賀美能天皇御願東寺寺務空海僧都
建立也。有日下毛野國公請沙門勝道歷山碑依
之和尚欲見二荒形偷出花京下向東國以弟子
真濟并大安寺法師幹海等為供奉先逗留伊豆
國桂谷寺弘仁十一年七月廿六日下著當山入
四本龍寺室云中畧又當中禪寺鬼門有阮穴名云
羅刹窟自彼窟大風吹出破損寺中并民屋一年
之内及兩度因茲号二荒和尚到彼岨穴辟除結
界改名日光云同十二月四日上洛而奏帝朝以
瀧尾為御願寺焉。

天長二年乙巳四月三日道珍記之

聖護院道興准后の同國雜記云瀧尾と申侍る無双の靈神云すく
々云と記云しあり高野大師の當國云下られ云こと云藥師寺縁起
より弘仁十一年五月藥師寺云下著云同七月下旬二荒山云と記云し
さて云に賀美能天皇とあり人皇五十二代嵯峨天皇云比御事云たわ絡
運録云桓武天皇弟二の皇子諱ハ神野親王又賀美能後小嵯峨天皇
と申奉るとあり

誅繇旃以正一位勲一等官階被授於權現矣又
依北戎蜂起而州民悉騷亂于時以田村為將軍
令征罰仍率數兵發向東國將軍被納自製願書
并重寶等於神殿既有感應不廻踵戎夷悉服誅
令為平均依之將軍又以甲冑弓箭馬鞍鞭等
被獻權現遂上洛奏此由有叡感而被勅進陸奧
武藏等貢物三分之一限永代於當山畢因茲會
役配於國人神業作於當山此時之僧舍如林森
然人法具盛也而後經十五年承和二年三月別
當僧仁朝下著當州國府館向顏國史攝清名請
記會役之大狀國公承諾上洛之時以仁朝所念
請槐林近來小野篁聞感此勝地自深筆作差定
之狀書是為備末代之龜鏡也又感歎本願上人
之勇猛號云菩薩也

天安元年乙丑閏六月 座主尊蓮記之

神宮會いづの如く毎歲怠らば其日神輿の志ありて入町鉢石
町よりうき種々の練物を出し舞狂言をばあやとて賑わし
日本後紀を考ふ弘仁元年藤原仲成妹尚侍藥子上皇の愛
慕り遷都のことにつく重祚の企をよめ奉る依て上皇藥子と
同輿あり給ひ東國に赴き給ふ坂上田村麻呂等當今の勅をうけ給ひて
路をまじり仲成を射殺し是に依て上皇は奈良宮に還御し給ひて
御飾をたらし僧と相とせ給ふ藥子いづつ毒を吞て死すとあり
ら上皇と申奉る平城天皇とさしあるをり當今則嗟峨
天皇より上皇の御弟とておはせり

圓仁和尚日光登山記

仁明天皇御宇嘉祥元年四月十六日和尚始登
日光山遊覽山内山外到中禪寺一七日令參籠

於神宮寺法施講經不知遍持於社殿内奉備財
施寺自大唐國玄法寺法全和尚所傳持金剛杵
并蘓悉地經一卷金字妙法蓮華經一部善無畏三藏
善提樹子念珠羯磨八葉唐鏡一面海中現生彌陀
四攝所坐蓮華一葉水牛香爐大象牙篋一管揚州
國司所進海龍王赤衣一領奉施入權現了云
同年七月五日歸去云下略

齊衡二年乙亥正月一日

熱借山陸
奥國伊達の
大木戸と云所
の西の方を
山多し日光山
より九十五里
許あり

曰、猿麻呂皆死為二荒神、山中有湖、近湖有沼、二
荒神與上野國赤城神爭湖、曰、此下野國也、赤城
神曰、此上野國也、相戰不決、赤城乘勝、二荒神憂
之、於之鹿島神誨之曰、猿麻呂神孫也、善射、蓋召
而勅力、或時猿麻呂狩熱借山、二荒神忽化鹿、入
熱借山、猿麻呂逐之、鹿走歸、二荒而不見、猿麻呂
尋之、俄見一婦呼猿麻呂曰、汝不知乎、妾是此山
主也、汝妾孫也、誘汝至此者、欲使汝伐冠我冠、赤

城神現蜈蚣、貌妾蛇、蟒姿、以是為證、汝獲克、則與
此山于汝、以為遊獵之地、猿麻呂諾去、明日日中
往視湖、西有沼、栢藤諸樹、滋茂、有蜈蚣、自西來、群
蛇出、鬪相螫、相咬、蜿蜒曼行、蜈蚣動、繞纏蛇頭、屈
蟠匍匐、彌山填谷、不知其幾百千也、猿麻呂不知
赤城神為何也、於是一巨蜈蚣、左右生角、與蛇蟒
急接、猿麻呂以為赤城神是也、而發矢、中左目、被
瘋奔、蛇欲追、北猿麻呂諫而止、為猿麻呂獨逐、而

日光山と赤城山の間に九十餘里あり根を赤利城山より三里許あり但西の方を宇都宮日光より東南へ九里許あり宇都宮と赤城山の間のハ九里許あり

行踰湯下過小山頂到上野國利根川而還其戰
場血流水赤故曰赤沼其草木皆染血故曰赤木
山今云赤城山木城同山下有温湯洗其劍故曰赤
比曾湯又謂其討寇處為宇都今之宇都宮是也
既而神告曰今賜汝以此山宜棲山麓我子太郎
神出則汝當為申口者猿麻呂悅而歌舞湖邊因
名其所曰歌濱猿麻呂在山下望巔有紫雲雲中
有黃鶴左右羽上現神形飛下至地化為夫婦告

猿麻呂曰我為二荒山女神羽上神是太郎大神
也汝宜為小野神其後猿麻呂往登俱示良今云上宿下宿
遷宇都宮又山中有三株杉大而盤根男神女神
太郎降於杉上謂之二荒三所神今尋其迹則所
謂男體本宮者男神也瀧尾女體中宮者朝日姬
也新宮太郎明神者馬王也宇都宮者猿麻呂也
或曰所謂男神女神者日本武尊與橘妃也祭之
山中云青史公曰在宇中將者是東州鄙人語也

按續日本紀天平神護元年二月始以授刀衛為
 近衛府其官負大將一人中將一人然則中將官
 始於聖武孝謙之世蓋此神者有於神武之前山
 名二荒者象陰陽二儀也夫既稱在宇中將則此
 神豈中葉已後之事哉余觀空海之碑野相公之
 緣起藤敷光之私記只舉山中之勝狀與浮屠之
 法事而不載此神下降之時世及在宇中將為何
 人而仕何帝也蓋闕疑也古者自伊弉諾伊弉冉

生山川山川自神靈何待在宇氏而始有神哉故
 奉之祭祀載之格式歲時必薦早潦必祈蘋蘩必
 歆誠敬必格齊明必感豈獨二荒而已哉諸社亦
 然云

在宇中將の事、前々太平記の日光山の条にも載り吾友安達元善の
 云元來在宇中將と云人の何もの世にも有し人ありあざむく在宇と云る宇宙
 不在ると云義あり大虚と云ていふもあざむく中將と云も官名の中
 將ありあざむく空中の事をいふもあざむく朝日氏ハその大虚より
 始て日の立昇る事以此を以て在宇中將都の方あり、たゞ東の方あり陸
 奥國ふたつと来りて朝日氏の姫不配して六年公経て馬王と云ふけり云
 一六年ハ則六時の事と云陰分の丑寅より次第不旋して既子日中の午の刻に至
 ると云ふこと、それよりあざむきて甲の刻ふ及ぶを以て椽麻呂と云名

日光山満願寺勝成就院堂社建立記

元禄四年未年七月日
前教城院天祐識とあり

座禅院

勝道上人ノ上ニ當山四代ノ座主昌禪講師ヲ以テ元祖トス住持ハ
代々當國小山宇都宮或ハ壬生寺ノ城主ノ苗ヲ以テ附弟トス元祖

ノ名ヲ慕ヒ實名ハ昌字ヲ用ル也慶長十八年昌尊法印不義アリシ依
テ黜セラレ昌尊ハ宇都宮ノ一族上三川左衛門尉ノ二男也寛永十八年己年断
絶ス舊地ハ今ノ御殿トナリシ也云々と記シテありテ聖護院道典准后の回
國雜記ニ日光山の本坊座禅院ニ著侍リテ云々別當座禅院法印昌源
トアリ云々

修學院

當山ノ學頭也天海大僧正ノ願ニ依テ正保二乙酉年草創也寺領三
百石宇都宮粉川寺兼長沼宗光寺權僧正傳海ヲ以テ元祖トス

五世の光海僧正憾捨ケ淵咒字ヲ彫ルト云カニマンハ慈救ノ咒ノ末ノ一句也
記シテありカニマンハ慈是あり悉曇十八章建字ヲ考メテ云々此
加^{カニ}花^{カニ}とあり又^{カニ}空^{カニ}点^{カニ}を加ヘ^{カニ}衆^{カニ}と形^{カニ}す^{カニ}云々此
如ク續^{カニ}テカニマンとありと及^{カニ}シテカニマンと呼^{カニ}ぶ^{カニ}あり^{カニ}云々慈救ノ咒
云ハ不動の真言ナウマクサマンガザラセシマカロシヤナンラヤウンタラカニマン

と云末の一句あり云々憾捨ケ淵ハ日光入街より大谷川の橋の向ニ慈雲
寺と云寺あり前ハ則^チ大谷川より向^チハ峨々^トる巖石の上ノ不動の石像立
り其下の厓の巖ニ彼咒字ハ彫付^リあり今世俗ハ弘法の投筆と唱^フ云々
なり憾捨の捨ハ捨^リト作^リ孔雀經あり

東照大權現宮

大樂院

満願大權現
御別當三十石

安養院

以上兩御別當八上
の神祇部ニ記シ

大猷院殿御靈屋

龍光院

慈眼堂
御別當六十石

無量院

以下一山大衆各
百二十石宛

唯心院

南照院

安居院

日増院

遊城院

教城院

櫻本院

禅智院

藤本院

護光院

醫王院

華藏院

惠乘院

養源院

法門院

浄土院

觀音院

實教院

光樹院

照尊院

浄土院の境内
安達盛長の石
塔あり

一山菩提所
三百石

妙道院

以下坊舎八十字八百石を配當外小各扶持を賜ふ

妙月坊

妙金坊

真鏡坊

日城坊

本龍坊

悦藏坊

光榮坊

城秀坊

鏡泉坊

杉本坊

大光坊

祐南坊

永觀坊

實勝坊

能觀坊

道福坊

正任坊

祐源坊

堯心坊

鏡德坊

正定坊

妙力坊

淨久坊

觀妙坊

龍圓坊

常觀坊

龍觀坊

大月坊

妙日坊

通來坊

林教坊

圓乘坊

勝泉坊

本月坊

圓觀坊

常觀坊ハ鎌倉
持氏朝臣の子
春玉安王と云
二人の君寺と云
まじり寺あり

城龍坊

城弘坊

通順坊

光藏坊

通勝坊

忍性坊

仲音坊

乘音坊

行實坊

醍醐坊

守光坊

城祐坊

妙珍坊

不動坊

智觀坊

碩善坊

圓融坊

櫻正坊

教觀坊

深妙坊

常福坊

正圓坊

慶住坊

正範坊

觀德坊

唯教坊

什光坊

永南坊

圓泉坊

大林坊

光禪坊

禪教坊

順教坊

實藏坊

文月坊

理宣坊

蓮性坊

教光坊

妙圓坊

深教坊

金藏坊 正覺坊 櫻秀坊 林守坊 道了坊

さて日光山の今の様子を委しく書し、近來出來し植田氏が日光山志と云ふのあきまことに載せしむるれが志し、古き成尋ね廢しるをいとめて吾も去り久しむるをせしむるに於ての事

常陸坊 五圓坊 奥野坊 五圓坊 常陸坊

國分寺

都賀郡國分村より、聖武天皇天平九年、國々の府中、小建立、同土年國分尼寺、建立、とあり、尼寺、廢し、

延喜主稅式、下野國正稅公廨各卅万束國分

寺料四万束云

凡諸國國分二寺各起正月八日迄十四日轉讀

寂勝王經其布施三寶絲卅斤僧尼各絶一足綿

一屯布二端定坐沙彌各布二端但供養用寺物

凡諸國分寺僧尼者待玄蕃寮移隨其定數許行

布施供養

同玄蕃寮式、上の如く記す

續日本紀十四、天平十三年二月乙巳詔曰、

每國僧寺施封五十戸水田十町尼寺水田十町

僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天王護

六像費也云

二十年秋七月殖稻于國分寺

天平十六年七月以稻二万束賜國分寺子母

計畫收其贏充修造僧尼兩寺皆遍殖何貨殖

之謂也

二十有三年冬十有一月納田于國分寺

天平十九年十一月勅國分寺塔婆僧坊皆令

修備因而納田僧寺九百畝尼寺四百畝

二十有五年秋七月定諸寺莊田

天平二十一年七月定諸寺莊田諸國分寺

各一万畝云

東鑑云、文治二年五月廿九日、國分寺破壊及同尼寺顛倒の事、
注すと記しあり、其頃ハ廢し、すもありしを、國分寺ハ天台宗も
あり、禪宗も有りて、國々今、混ト、す、ま、て、當國分寺ハ、真言宗の小坊舎
なり、但、舊跡ハ、古尼坊と云、左の如く、都司寒川ハ、郡名あり、

下野國誌五





下野國誌五之卷終

二十五年五月...



足利 北越

梅溪田崎明義書
比邨遠藤順信書

